御　蔵　遺　跡

第17・38次発掘調査報告書

御菅東地区震災復興土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００１年３月

神戸市教育委員会

御　蔵　遺　跡

第17・38次発掘調査報告書

御菅東地区震災復興土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００１年３月

神戸市教育委員会

序

阪神・淡路大震災の発生から、６年の歳月が過ぎました。この震災では、神戸市内各地に大変大きな被害をおよぼしました。本書の発掘調査が行われた長田区は、その被害が特に甚大なところでした。その中でも御菅通・菅原通一帯は地震直後の火災にも遇い、特に被害の大きかった地区でした。

震災後神戸市は、この地域を神戸国際港都建設事業御菅東地区震災復興土地区画整理事業区域と定め、復興に努めてまいりました。この土地区画整理事業の進捗にあわせ、今回報告する御蔵遺跡の埋蔵文化財発掘調査を進め、飛鳥時代の掘立柱建物等この地域の歴史を考える上で貴重な成果を得ることができまた。

発掘調査が完了した区域から随時計画に沿った土地区画整理事業が進み、新たな街づくりがはじまっています。

本書の報告にある過去の人々の営為に思いを馳せるとともに、過去の経験を活かす一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた方々、関係諸機関に厚く御礼申しあげます。

２００１年３月

神戸市教育委員会

教育長　木村良一

例　　言

1. 本書は、神戸国際港都建設事業御菅東地区震災復興土地区画整理事業に伴い、神戸市都市計画局より委託され、神戸市教育委員会・(財) 神戸市体育協会が実施した、御蔵遺跡の第17次および第38次埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 本報告の発掘調査地点は神戸市長田区御蔵通４丁目に所在する。

3. 第17次調査の調査次数については調査時には「第23次」と呼称していたが、本報告によって「第17次」と訂正する。なお、遺物・図面・写真等は、「第23次」と記載して保管している。

4. 発掘調査は第17次調査は平成11年度、第38次調査は平成12年度に実施した。各調査の調査期間・調査面積等は、第１章第３節に記載してある通りである。

5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の１の地形図「神戸首部」・「神戸南部」を、詳細位置図は、神戸市発行の2500分の１の地形図「大橋」の一部を使用した。

6. 本書に用いた方位・座標は平面直角座標系第Ⅴ系で、当遺跡では真北から30′、磁北から７° 10′東に振る。標高はＴ．Ｐ．で表示した。

7. 本書の執筆は、第２章第１節遺構については第１章第３節に記載した各調査担当者が執筆し、第１章・第２章遺物・第３章については安田滋が執筆した。これを安田が編集した。

8. 遺構写真は各調査担当者が撮影した。遺物写真については奈良国立文化財研究所　牛嶋　茂氏の指導を得て、牛嶋氏および杉本和樹氏が撮影した。

9. 本調査で出土した馬の歯については奈良国立文化財研究所主任研究官　松井　章氏に御教示いただいた。

目　　次

序
例言
第１章　はじめに ……1
　第１節　御蔵遺跡の立地 ……1
　第２節　歴史的環境 ……2
　第３節　調査に至る経緯と経過 ……4
　　１．調査に至る経緯 ……4
　　２．調査の経過 ……4
　第４節　調査体制 ……6
第２章　調査の成果 ……7
　第１節　はじめに ……7
　　１．調査区の設定 ……7
　　２．基本層序 ……7
　第２節　遺構 ……8
　　１．第１調査区 ……8
　　２．第２調査区 ……11
　　３．第３調査区 ……13
　　４．第４調査区 ……14
　　５．第５調査区 ……15
　第３節　遺物 ……16
第３章　まとめ ……18

挿図目次

fig.１　御蔵遺跡の位置 ……1
fig.２　周辺の遺跡 ……3
fig.３　調査地位置図 ……5
fig.４　調査区配置図 ……7
fig.５　基本層序図 ……7
fig.６　第１調査区平面図 ……9
fig.７　第２調査区平面図 ……10
fig.８　ＳＢ01平面・断面図 ……11
fig.９　ＳＢ02平面・断面図 ……12
fig.10　ＳＢ03平面・断面図 ……12

fig.11　第３調査区平面図 ……13
fig.12　第４調査区平面図 ……14
fig.13　第５調査区平面図 ……15
fig.14　出土遺物実測図 ……17
fig.15　御蔵遺跡東半主要遺構配置図 ……19

図版目次

PL.１ ……御蔵遺跡全景（南から）
御蔵遺跡全景（東から）
PL.２ ……第１調査区北半全景（南から）
第１調査区中央全景（北から）
第１調査区南半全景（北西から）
PL.３ ……第１調査区ＳＤ03・ＳＤ04（南から）
第１調査区ＳＫ01・ＳＤ04（北から）
第１調査区ＳＫ01断面（北から）
PL.４ ……第２調査区全景
PL.５ ……第２調査区北半全景（北から）
第２調査区中央全景（南から）
PL.６ ……第２調査区ＳＢ01（南から）
第２調査区ＳＢ02（東から）
第２調査区ＳＢ03（南から）
PL.７ ……第３調査区東半全景（西から）
第３調査区西半全景（東から）
第４調査区全景（西から）
第５調査区全景（東から）
PL.８ ……出土遺物(1)
PL.９ ……出土遺物(2)

第１章　はじめに

第１節　御蔵遺跡の立地

御蔵遺跡は、六甲山系南麓の東西に細長い平野部の西端近くに位置する。現在はＪＲ山陽本線兵庫駅と新長田駅の中間付近の北側の市街地に存在する。現住所では神戸市長田区御蔵通４・５・６丁目に所在する。遺跡の範囲は東西750m、南北650mで、面積は約8.9ha である。本報告の調査地は、遺跡の東端にあたり、御蔵通４丁目に位置する。

神戸市街地の背後に連なる六甲山系の南麓には、中小河川によって更新世以降に形成された扇状地や沖積地が発達している。当遺跡は新湊川(旧刈藻川)左岸の完新世に形成された自然堤防上の微高地から後背湿地に立地する。標高は５ｍ前後である。これまでの調査では、幾層もの洪水砂層が確認されており、河川の管理が行き届かなかった時代においては、幾度となく洪水にみまわれていたようである。

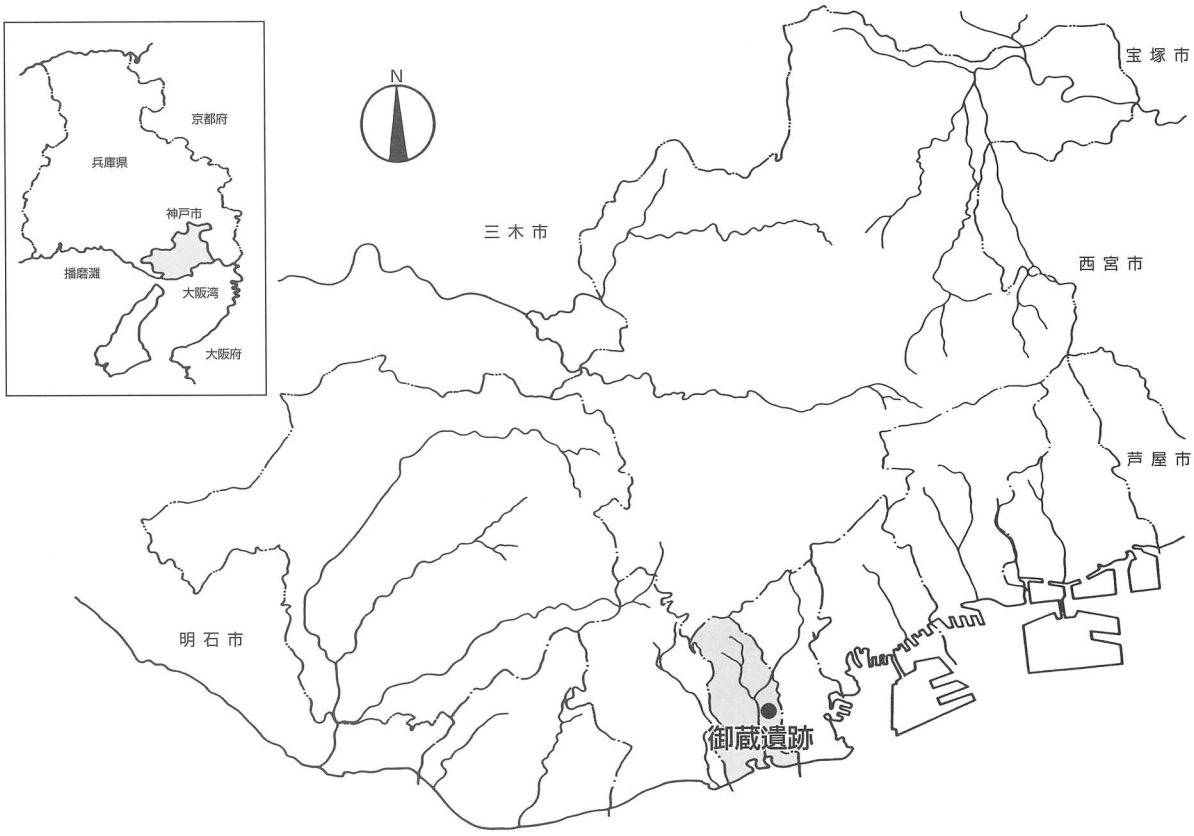


fig.１　御蔵遺跡の位置

第2節　歴史的環境

旧石器～縄文時代　旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡は周辺地域では少なく[1]、明らかではない。

弥生時代　縄文時代晩期末から弥生時代前期なると大開遺跡[2]、戎町遺跡[3]、楠・荒田町遺跡[4]など遺跡数がやや増加してくる。大開遺跡では弥生時代初頭の環濠集落が見つかっており近畿地方でも最古の弥生集落の一つである。また戎町遺跡では弥生時代前期の水田が見つかっておりこの地域の水田農耕の始まりを示す資料である。

弥生時代中期は当地域では、前期から継続する戎町遺跡、楠・荒田町遺跡などを除き、遺跡数はさほど増加しない。

弥生時代の後期では、松野遺跡[5]、長田神社境内遺跡[6]などがあげられる。遺跡数がやや増加する傾向がある。弥生時代は、沖積地の可耕地を基礎にして、集落が形成されていくようである。

古墳時代　古墳時代前期には、鷹取町遺跡[7]、若松町遺跡[8]、三番町遺跡[9]などの集落で生活が始まる。戎町遺跡は前期頃までは継続するが、中期以降集落は途絶える。

周辺の丘陵上には前期古墳が築造される。西から得能山古墳[10]、会下山二本松古墳[11]、夢野丸山古墳[12]が知られている。これらは、この地域の首長層の古墳と考えられる。

古墳時代中期になると、松野遺跡、神楽遺跡[13]、三番町遺跡、上沢遺跡[14]などががあげられ、いずれも竪穴住居と掘立柱建物によって構成される集落である。特に松野遺跡では豪族居館と考えられる溝と柵に囲まれた掘立柱建物址が見つかっている。神楽遺跡では韓式系土器や算盤玉形滑石製紡錘車が出土している。三番町遺跡では、小型倣製鏡が大溝から出土している。上沢遺跡では大壁造建物や韓式系土器、大量の滑石製玉製品などが検出されている。

中期の古墳では、念仏山古墳[15]が知られている。鰭付円筒埴輪の出土が知られており、地形などから砂堆上に築造された全長100ｍを越す前方後円墳であると考えられてる。

古墳時代後期には、鷹取町遺跡・湊川遺跡[16]、楠、荒田町遺跡などの遺跡があげられる。

後期古墳については、丘陵上や刈藻川沿いにかつて存在したようだ[17]が、現状ではその実態を知る手掛かりは少なく、名称のみが伝承するものも多い。

奈良～平安時代　奈良時代には、古墳時代を中心に形成された集落を縫うように古代山陽道が築造される。この地域での陸上と海上の交通路がより充実していく。奈良時代から平安時代にかけての遺跡として、長田野田遺跡[18]、大田町遺跡[19]、神楽遺跡[20]、上沢遺跡[21]などがあげられる。このうち大田町遺跡は古代山陽道に設置された「須磨駅」の可能性がある。

中世　平安時代末には、平氏政権によって大輪田の泊が修築される。前後する時期からさらに遺跡数は増加していく。平安時代末から鎌倉時代にかけての集落は、若松町遺跡、二葉町遺跡[22]、松野遺跡[23]、長田野田遺跡、御船遺跡[24]、長田神社境内遺跡、上沢遺跡、大開遺跡などがあげられる。

1	御蔵遺跡	6	会下山ニ本松古墳	11	三番町遺跡	16	神楽遺跡	21	大田町遺跡
2	楠・荒田町遺跡	7	会下山遺跡	12	名倉遺跡	17	念仏山古墳	22	若松町古墳
3	兵庫松本遺跡	8	上沢遺跡	13	長田神社境内遺跡	18	二葉町遺跡	23	長田野田遺跡
4	大開遺跡	9	室内遺跡	14	長田南遺跡	19	松野遺跡		
5	兵庫津遺跡	10	五番町遺跡	15	御船遺跡	20	戎町遺跡		

fig. 2　周辺の遺跡

第３節　調査に至る経緯と経過

１．調査に至る経緯

御蔵遺跡は平成２年度に御蔵通４丁目において、みすが地域福祉センター建設に伴う発掘調査で初めて発見された遺跡である。この第１次調査時には平安時代後期から中世にかけての遺物包含層は見つかったが、遺構等は検出されず遺跡の性格等は不明であった。

この第１次調査以降長らく当遺跡内では調査は行われておらず、遺跡の広がりや性格は不明のままであった。

当地区は長田区役所等の行政施設が集積するエリアの南方に位置し、震災前は戦前長屋等が残る住宅地として、また市場・商店街や家内工業を中心とした中小規模の工場が立地する地域であった。

平成７年１月17日、阪神・淡路大震災が発生し、神戸市内各地で甚大な被害をもたらした。中でも長田区は被害の大きかった地域であったが、御蔵通・菅原通は地震直後の大火災にも遇い約９割の建物が大きな被害を受けた。

神戸市は早期の復興および安全で快適な市街地整備のため、平成７年３月17日御菅東地区震災復興土地区画整理事業として都市計画を決定した。そして平成８年11月６日に事業計画が、平成９年11月27日に地区計画が決定し、事業が本格的に始まった。

平成10年度に行った、御菅西地区土地区画整理事業区域内の被災者受け皿住宅である、市営御菅西第１住宅建設に伴う発掘調査（第２次調査）において、奈良時代の掘立柱建物建物や井戸が見つかり、初めて御蔵遺跡の遺構が明らかになった[25]。

御菅東地区においても同様の遺構が存在する可能性があるため、事業の進捗に伴いそれまで不明であった御蔵遺跡の範囲を把握するために、平成10年６月24日に事業区域内の試掘・確認調査を実施した。

その結果、御菅東地区においても遺構や遺物が発見され、遺跡の広がりがほぼ確認された。その結果を基に、平成11年６月14日から区画道路部分についての本発掘調査を実施した。

２．調査の経過

今回報告する当地区の本発掘調査は、平成11年度に実施した第17次調査と平成12年度に実施した第38次調査である。調査は事業の進捗に合わせて、事業区域内で遺跡の存在する範囲の区画道路部分について実施した。また道路側溝部分については工事によって遺物包含層並びに遺構面が削平されるおそれのあるレベルまでの調査とした。

平成11年度の第17次調査は、平成11年６月14日から７月15日（第17-1次）、７月26日から８月10日（第17-2次）、９月21日から９月28日（第17-3次）、11月４日から11月10日（第17-4次）、11月16日から11月22日（第17-5次）、12月14日から12月21日（第17-6次）の計６回に分けて実施した。

平成12年度の第38次調査は、平成12年５月30日から６月８日（第38-1次）、７月10日から７月14日（第38-2次）、８月24日から９月５日（第38-3次）までの計３回に分けて実施した。

本報告の調査一覧

年度	次数	調査開始日	調査終了日	調査面積	調査地区	調査担当者
11	17-1	H11. 6. 14	H11. 7. 15	165㎡	第2調査区中・南 第5調査区	西岡　誠司
	17-2	H11. 7.26	H11. 8.10	80㎡	第2調査区　北	池田　　毅
	17-3	H11. 9. 21	H11. 9. 28	35㎡	第2調査区　北	中居　さやか
	17-4	H11. 11. 4	H11. 11. 10	72㎡	第1調査区　南	安田　　滋 阿部　　敬生
	17-5	H11. 11. 16	H11. 11. 22	67㎡	第4調査区	安田　　滋
	17-6	H11. 12. 14	H11. 12. 21	120㎡	第1調査区　北	安田　　滋
12	38-1	H12. 5. 30	H12. 6. 8	100㎡	第1調査区　中	阿部　　功
	38-2	H12. 7. 10	H12. 7. 14	23㎡	第3調査区　東	阿部　　功
	38-3	H12. 8. 24	H12. 9. 5	16㎡	第3調査区　西	阿部　　功

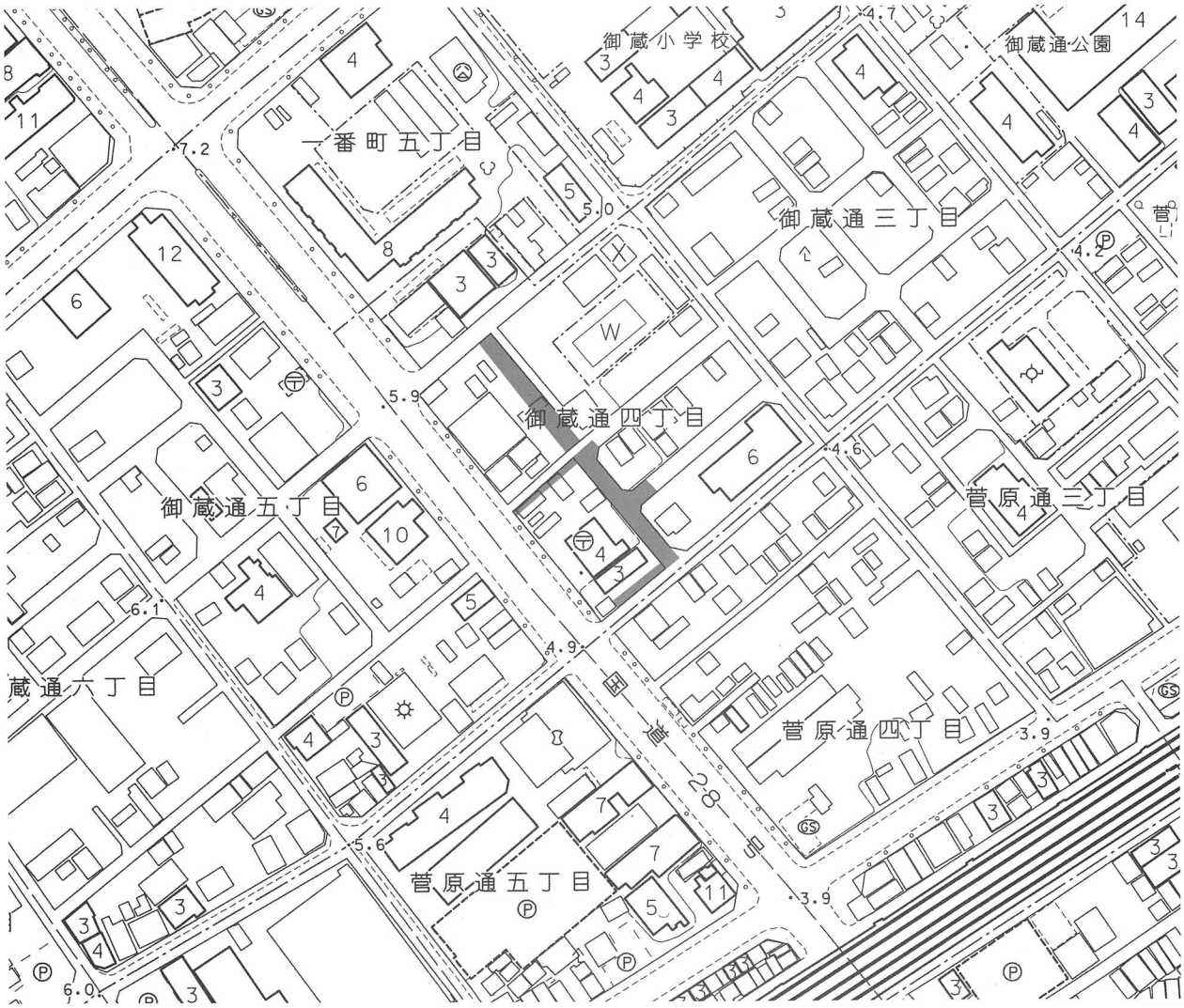


fig. 3　調査地位置図（S=1/2500）

第4節　調査体制

平成11年度（第17次調査）

神戸市文化財保護審議会委員　史跡・考古担当

檀　上　重　光　　前神戸女子短期大学教授
工　楽　善　通　　ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
和　田　晴　吾　　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	鞍本　昌男
社会教育部長	水田　裕次
文化財課長	大勝　俊一
埋蔵文化財係長	渡辺　伸行
文化財課主査	丹治　康明
同	丸山　　潔
同	菅本　宏明
事務担当学芸員	東　喜代秀
同	井尻　　格
同	藤井　太郎
遺物整理担当学芸員	平田　朋子
保存科学担当学芸員	千種　　浩
	中村　大介

(財)神戸市体育協会

会長	笹山 幸俊
副会長	田村　篤雄
専務理事（兼務）	田村　篤雄
常務理事	中野　洋二
同	静観　圭一
総務課長	村田　孝政
総務課主幹	中西　光男
同	奥田　哲通
総務課主査	丹治　康明
事務担当学芸員	斎木　　巌
調査担当学芸員	西岡　誠司
同	安田　　滋
同	池田　　毅
同	阿部　敬生
同	中居さやか

平成12年度（第38次調査・遺物整理業務）

神戸市文化財保護審議会委員　史跡・考古担当

檀　上　重　光　　前神戸女子短期大学教授
工　楽　善　通　　ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
和　田　晴　吾　　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	木村　良一
社会教育部長	水田　裕次
文化財課長	大勝　俊一
社会教育部主幹	渡辺　伸行
（埋蔵文化財指導係長事務取扱）	
事務担当学芸員	西岡　誠司
同	東　喜代秀
同	橋詰　清孝
埋蔵文化財調査係長	丹治　康明
文化財課主査	宮本　郁雄
同	丸山　　潔
同	菅本　宏明
事務担当学芸員	山口　英正
遺物整理担学芸員	谷　　正俊
保存科学担当学芸員	千種　　浩
同	中村　大介

(財)神戸市体育協会

会長	笹山　幸俊
副会長	木村　良一
同	鞍本　昌男
（専務理事事務取扱）	
同	山田　　隆
同	家治川　豊
相談役	加茂川　守
常務理事	静観　圭一
参事	財田　美信
総務課長	前田　豊晴
事業係長	瀬田　吉則
事業係主査（兼務）	丸山　　潔
同　（兼務）	菅本　宏明
事務担当学芸員	斎木　　巌
調査担当学芸員	阿部　　功

第２章　調査の成果

第１節　はじめに

１．調査区の設定

第１章で述べたように発掘調査は事業の進捗に合わせて行ったため、同じ区画道路部分の調査に関しても、細切れの調査になっている。今回の報告では、調査次数とは別に各道路毎に調査区を設定して報告する。なお各調査次数と、今回報告の調査区の関係はfig.4の通りである。

２．基本層序

今回報告する区域での層序は各調査区ほぼ同様で、上層から盛土・近現代の耕土・明灰褐色中砂（中世から近世の旧耕土）・灰色砂混じりシルト（奈良時代から中世の遺物包含層）・黒褐色砂混じりシルト（弥生時代後期末から奈良時代の遺物包含層）・黄褐色粘土～粗砂（遺構面）となる。部分的には層の欠落する部分がある。

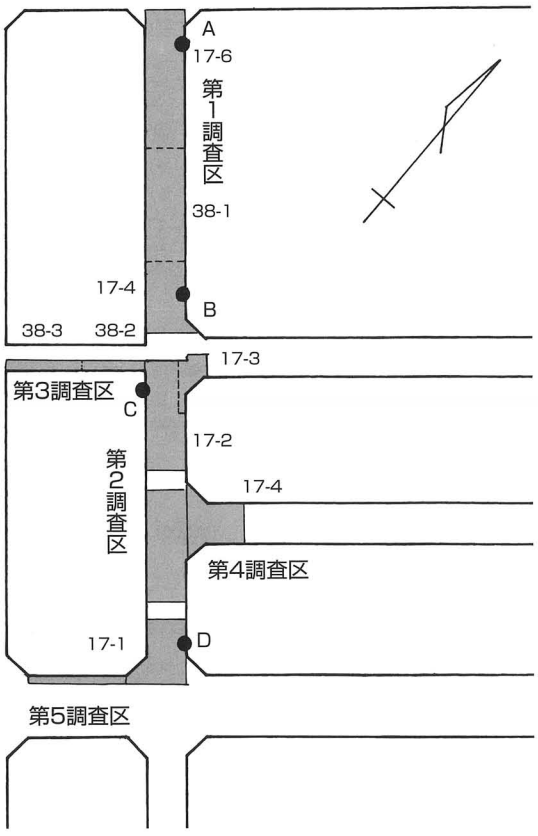
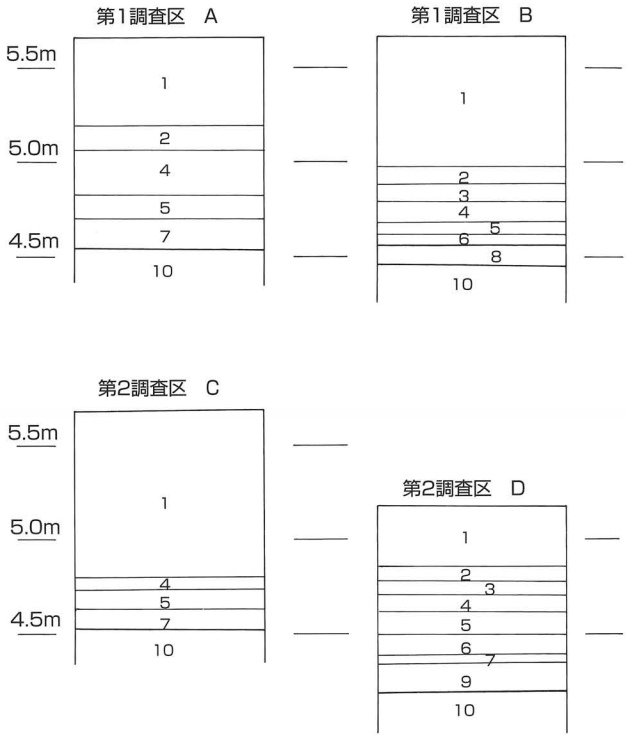


fig. 4　調査区配置図
（数字は調査次数、アルファベットは層序図の位置を表す）



1. 現代盛土
2. 近現代耕土
3. 明黄褐色シルト～中砂
4. 淡灰色中砂
5. 灰色砂混りシルト
6. 明灰褐色シルト混中砂
7. 暗灰褐色シルト（遺物包含層）
8. 黒茶褐色シルト混粗砂（SX05埋土）
9. 茶褐色シルト
10. 黄褐色粘土～粗砂

fig. 5　基本層序図

第２節　遺構

１．第１調査区

第１調査区は幅６ｍ、長さ約100mの区画道路６号線の北半部分の調査区である。この調査区からは、土坑２基、溝４条、不定形の落ち込み３基、ピット等が検出された。

ＳＤ01　ＳＤ01は調査区北半で検出した北西から南東方向の浅い溝状の遺構で、幅0.9m、深さ10㎝、長さ５ｍを測る。埋土は黒灰色シルトである。この遺構の底では馬と思われる足跡が多数検出された。

ＳＤ02　ＳＤ02は調査区北半で検出した北東から南西方向の浅い溝状の遺構で、幅 3.0m、深さ15㎝を測る。埋土は暗灰褐色シルトである。出土遺物は土師器の小片のみで詳細な時期は明らかではないが、ＳＤ01に切られていることから、奈良時代～平安時代前期のものと考えられる。

ＳＤ03　ＳＤ03は調査区中央で検出した幅90～115cm 、深さは20cm前後の東西方向の溝である。両端は調査区外へと続く。埋土は基本的に上から細砂混じりの暗灰褐色粘質土、暗灰褐色粘質土、暗灰褐色砂質シルトである。出土遺物は小片が大半であるが、奈良時代～平安時代のものと考えられる須恵器、土師器が出土している。

ＳＤ04　ＳＤ04は調査区中央部で検出した幅65～90cm、深さは25cm前後の東西方向の溝である。両端は調査区外へと続く。埋土は上から褐灰色細砂、暗褐灰色シルト質細砂、黒灰色砂質シルト、灰色シルト質極細砂、暗灰色砂質シルトである。ＳＤ03から南に約５m離れてほぼ平行しており、御蔵遺跡で見つかっている建物の方向と同じく、ほぼ東西方向を向く。これらのことから、この２本の溝の間は道路の可能性がある。出土遺物は小片が大半であるが、奈良時代～平安時代前半と考えられる須恵器、土師器が出土している。

ＳＫ01　ＳＫ01は直径1.7m、深さ1.1mの円筒形の土坑である。埋土の観察から水が溜まっていた形跡があり、また最終的には人為的に埋められた様子が伺える。形状や埋土の状況から水溜めの遺構と考えられる。

ＳＸ01　ＳＸ01は調査区の北東隅で検出された幅 1.3m以上、深さ15㎝の浅い落ち込み状の遺構である。調査区外に広がるため全体の形状は不明である。出土遺物は須恵器・土師器の小片のみであるが、12世紀～13世紀頃のものと考えられる。

ＳＸ02　ＳＸ02は幅2.5m、深さ20㎝の浅い溝状の遺構で、北側ではほぼ直角に曲がり東側に続く。南側では東側に広がる。遺構の底には馬と思われる足跡が多数検出された。出土遺物は小片が大半であるが、平安時代前半（９世紀～10世紀）の須恵器、土師器、黒色土器、瓦片が出土している。

ＳＸ03・ＳＸ04　ＳＸ03とＳＸ04は調査区中央で検出した幅15～35cm、深さは検出面から2～6cmの東西方向に続く窪みである。東側は調査区外へと続く。埋土は暗紫灰色粘質土混じりの暗灰色砂質シルトである。遺構底は不定形な窪み状を呈しており、深さは一定ではないので、牛や馬などの踏み込みによるものと考えられる。出土遺物は微細な小片が大半であるが、奈良時代のものと考えられる須恵器、土師器が出土している。

ＳＸ05　ＳＸ05は不定形の浅い落ち込みである。調査区内では5.8m×3.5mの範囲で、深さ10cm

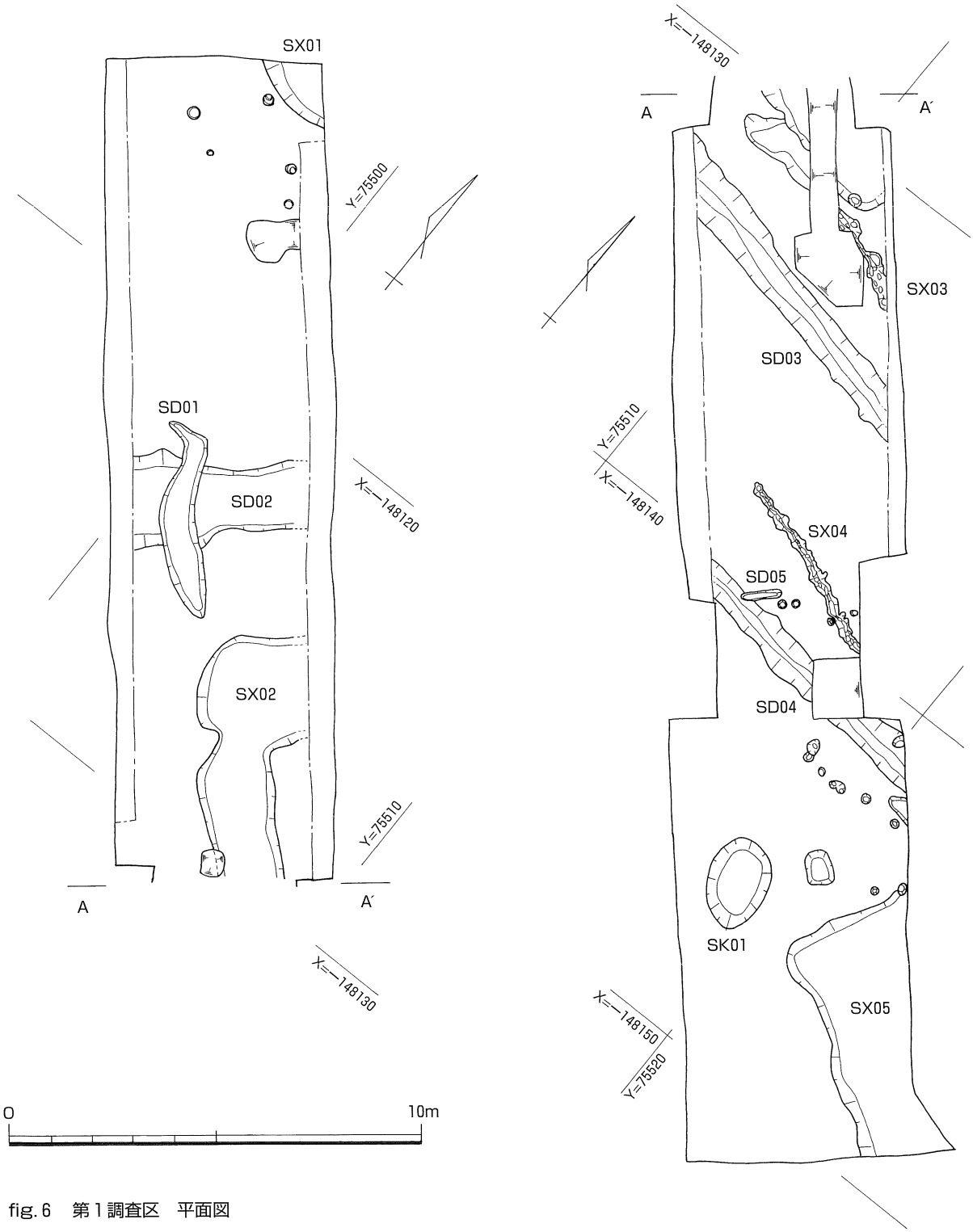


fig. 6　第１調査区　平面図

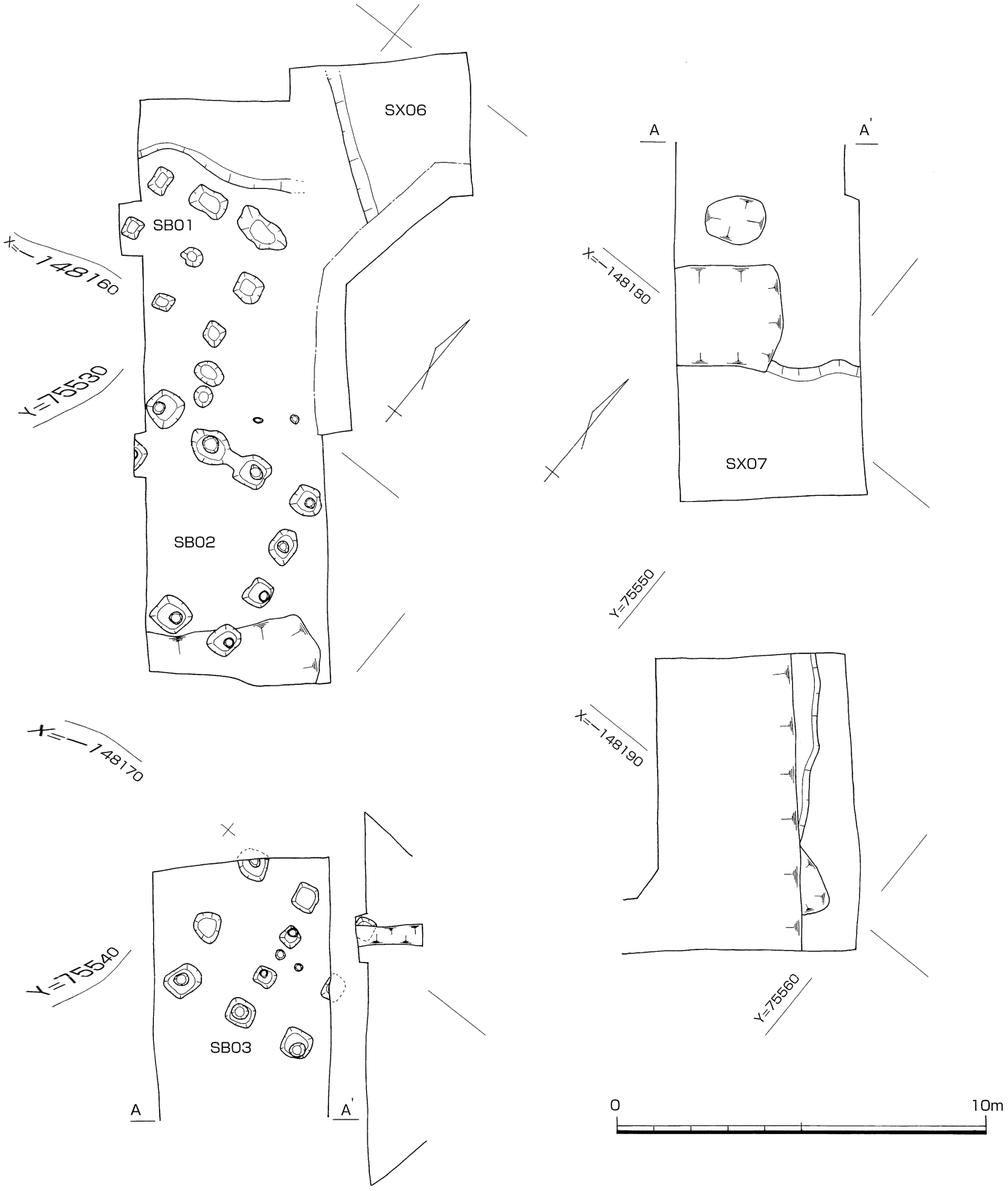


fig. 7　第2調査区　平面図

程度窪んでいるが、調査区の東側に広がるため全体の形状は不明である。遺構の底には馬と思われる足跡が多数検出された。須恵器・土師器が出土した小片のため詳細な時期は明らかではないが、奈良時代～平安時代前半のものと考えられる。

2．第2調査区

第2調査区は幅6ｍ、長さ約 100mの区画道路6号線の南半部分の調査区である。この調査区からは、掘立柱建物3棟、不定形の落ち込み2基が検出された。

SB01

ＳＢ01は一辺が東西3.5m、南北3.2mの平面形がほぼ正方形の建物で、２間×２間の総柱の構造になっている。柱間距離は東西方向が1.6～1.8ｍ、南北方向が1.5mを測る。南北方向の軸はＮ６°Ｗを向く。柱の痕跡は無く、抜き取られているようである。掘形の形状は一辺50cmから70cmの方形ないし長方形を呈している。一部柱を抜いたために掘形の形状が崩れているものもある。柱穴からは土器の小片が出土している程度で、建物の時期比定は難しいが、建物の規模・形状・方向性や後述するＳＢ02の西辺と、この建物の東辺の柱通りが並ぶことから、ＳＢ02と同時期の建物と考えられ、飛鳥時代（７世紀前半）の建物と考えられる。

SB02

ＳＢ02は一辺が東西4.8m、南北4.5mの平面形がほぼ正方形の建物で、３間×３間の側柱のみの構造になっている。柱間距離は東西方向が1.6 ～1.8m、南北方向が1.5mを測る。南北方向の軸はＮ７°Ｗを向く。掘形の形状は一辺70cmから100cm の方形ないし不定形を呈している。建物北東コーナーの柱穴の柱痕部分より、飛鳥時代（ＴＫ209 型式～ＴＫ217 型式[26]、７世紀初頭～前半）に属する遺物が出土しており、この建物の存在時期を示す遺物と考えられる。

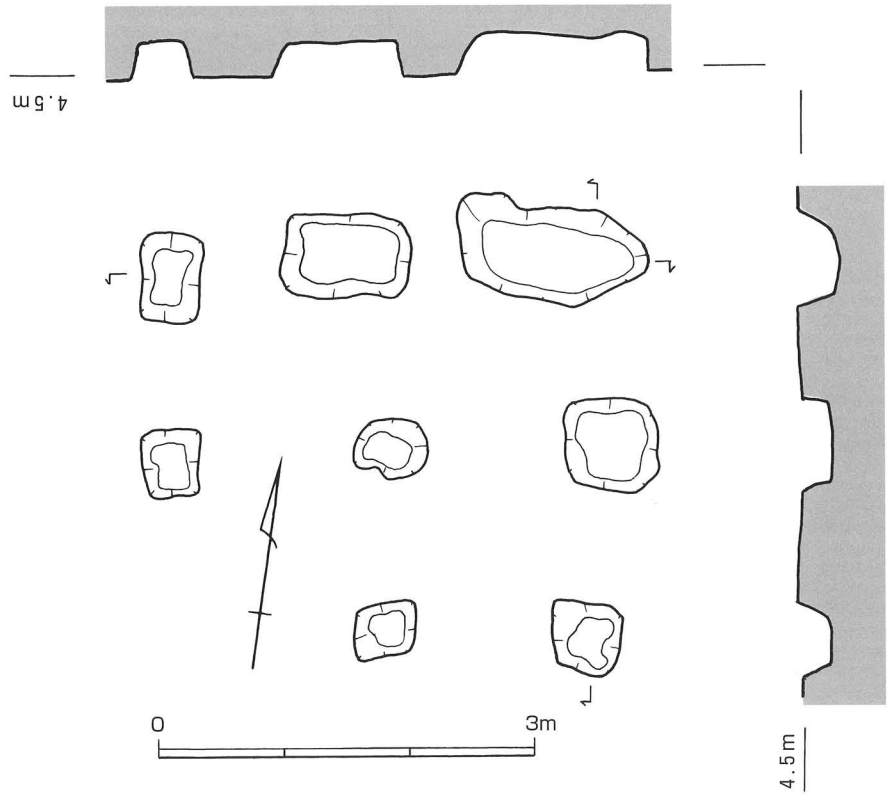


fig.8　ＳＢ01　平面・断面図

fig. 9　ＳＢ02　平面・断面図

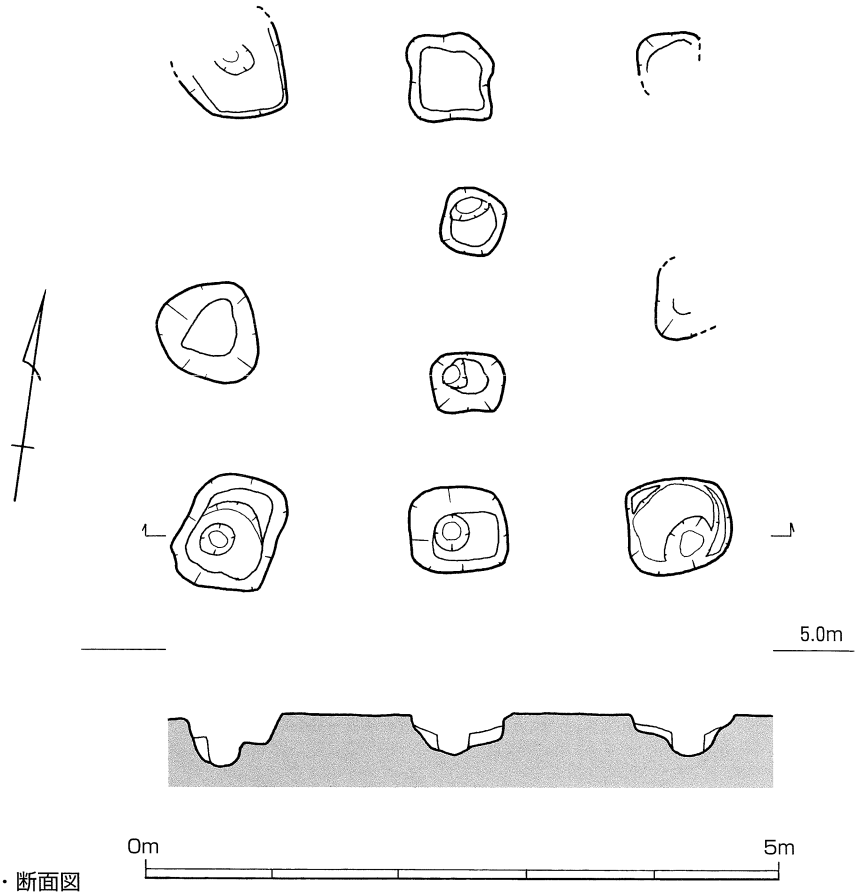


fig.10　ＳＢ03　平面・断面図

SB03　ＳＢ03は一辺が東西3.7m、南北3.9mの平面形がほぼ正方形の建物で、側柱は２間×２間、東西方向中央列は柱間1.1～1.2mの間隔で３間の構造になっている。柱間距離は東西方向が1.8～1.9m、南北方向が1.7～2.1mを測る。南北方向の軸はＮ７°Ｗを向く。柱の痕跡が無いものもあり、一部の柱は抜き取られているようである。掘形の形状は一辺70cmの方形を呈している。一部柱を抜いたために掘形の形状が崩れているものもある。柱穴からは、土器は小片が出土している程度なので建物の時期比定は難しいが、建物の規模・形状・方向性からＳＢ02と同時期の建物と考えられ、飛鳥時代（７世紀前半）の建物と考えられる。建物とは直接関係する遺物ではないが、南辺中央の柱穴から弥生時代後期末の讃岐産二重口縁壺の破片が出土している。

SX06　ＳＸ06は深さ約20㎝の浅い落ち込みである。遺構内からは弥生時代後期末の河内産庄内甕片が出土しているが、第１調査区のＳＸ05と同様の埋土であり、また落ち込みの西肩の方向が同じであるため、ＳＸ05の続きと考えられる。

SX07　ＳＸ07は調査区の南端で見つかった浅い落ち込みである。暗茶褐色砂混じりシルトを埋土として弥生時代後期末の遺物を含む。この中から吉備系の甕片が出土している（PL.８左上中段）。

３．第３調査区

第３調査区は幅4m、長さ21mの歩行者専用道路１号線のうち現況道路部分を除いた幅2m長さ19ｍの調査区である。この調査区からは、溝１条、ピット６基が検出された。

SD05　ＳＤ05は幅48cm前後、深さは検出面から20cm前後の北西から南東方向の溝である。両端は調査区外へ続く。埋土は暗黒灰色シルトである。出土遺物はなかった。

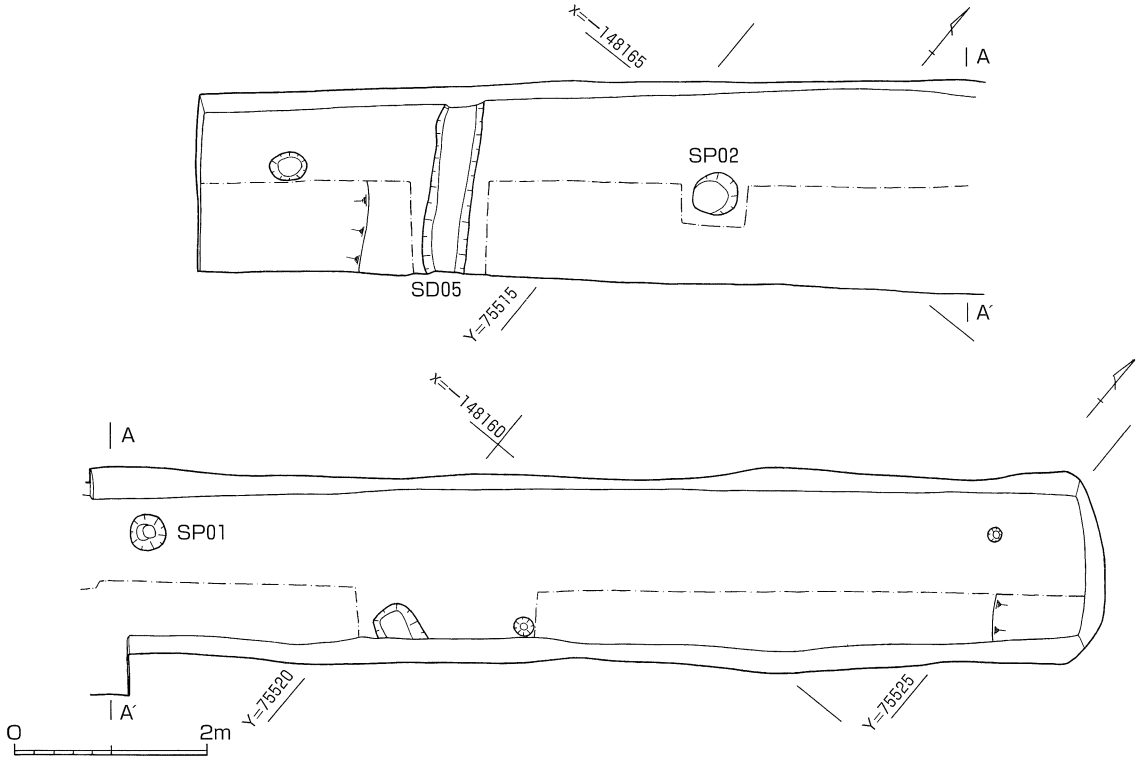


fig.11　第３調査区　平面図

ピット　ピットは６基を検出した。直径15～45cm、深さは検出面から5～25cmである。出土遺物は一部のピットから土師器の小片が出土したのみである。このうちＳＰ01とＳＰ02はすぐ北側で、平成11年度に行った個人住宅建設に伴う第30（旧35）次調査でみつかっている２基の柱穴と合わせて２間×４間の掘立柱建物になる可能性がある。

４．第４調査区

第４調査区は幅６m、長さ約60mの区画道路８号線のうち、試掘調査で遺跡の存在が確認された西端から11mまでの調査区である。この調査区からは、溝３条、不定形の落ち込み１基、ピット１基が検出された。

ＳＤ06　ＳＤ06は調査区の中央で検出された溝で幅60cm、深さ20cmを測る。北西から南東方向に流れている。この溝より東では柱穴等の遺構は見られないことから、なんらかの区画を示す溝と考えられる。

ＳＸ08　ＳＸ08は不定形の浅い落ち込みである。調査区内では7.5m×1.1mを測るが、調査区の南側に広がるため全体の形状は不明である。深さは５cm程度である。遺構の底には馬と思われる足跡が多数検出された。

ピット　ピットは調査区の西端で１基確認された。掘形は一辺60cmの隅丸方形を呈し、深さは35cmを測る。柱痕は現代の攪乱のため検出されなかった。第２調査区で確認された掘立柱建物ＳＢ03の北東コーナーの柱穴である。

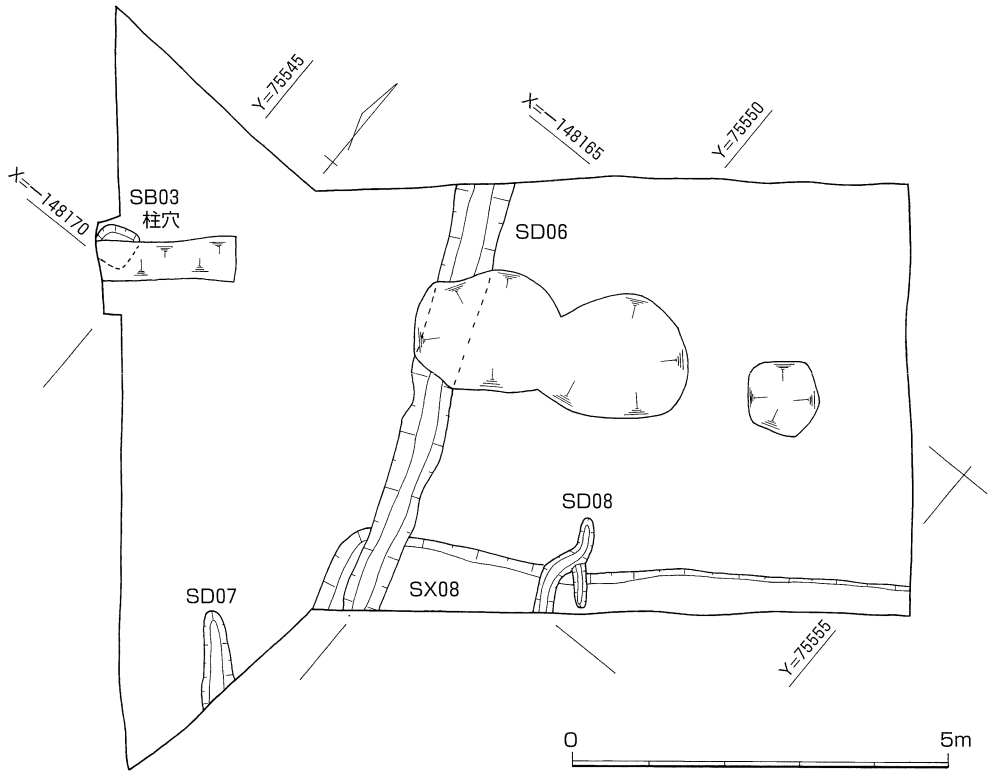


fig.12　第４調査区　平面図

５．第５調査区

第５調査区は区画道路１号線のうち現況道路が北側に拡張される部分のうち、試掘調査で遺跡の存在が確認された範囲までの調査区で、幅1.5m、長さ16mの調査区である。この調査区からは、土坑１基、溝２条、不定形の落ち込み１基、ピット１基が検出された。

ＳＤ09　ＳＤ09は調査区の中央東で検出された溝で幅30～60cm、深さ15cmを測る。東西方向に流れており、後述するＳＫ02を切る。埋土から７世紀代の須恵器と土師器の小片が出土している。

ＳＤ10　ＳＤ10は調査区の中央東で検出された溝で幅約60cm、深さ10cmを測る。東西方向に流れており、ＳＤ09の北側約２ｍで平行している。埋土内から７世紀前半代の須恵器の坏・甕と土師器の小片が出土している。

ＳＫ02　ＳＫ02は幅1.9m、長さ１ｍ以上の土坑である。南北は調査区外に続くことから全体の形状は明らかでない。須恵器と土師器の甕の破片が出土しているが時期は明らかでない。

ＳＰ03　ＳＰ03は直径50～60cm深さ30cmである。平成11年度に、調査地の北側で個人住宅建設に伴って実施した第27(旧32)次調査で検出された2間×3間以上の掘立柱建物（ＳＢ01）の東側柱穴の一部である。

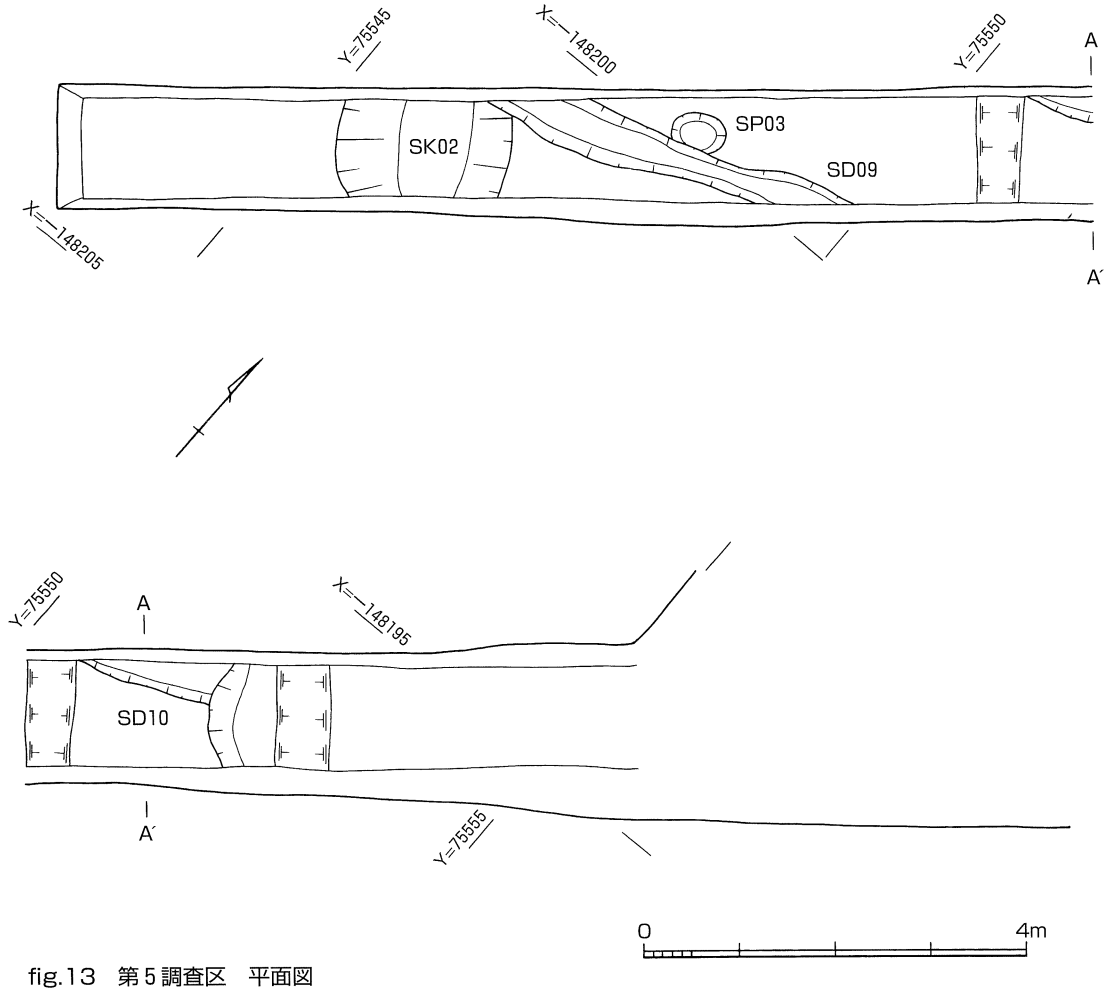


fig.13　第５調査区　平面図

第３節　遺物

今回の調査では、遺構に伴って出土した遺物は少量で、そのほとんどが遺物包含層からの出土である。

弥生時代後期末

１は遺構とは直接関係ないが、ＳＢ03の柱穴内から出土した讃岐産二重口縁壺の口縁部である[27]。胎土は角セン石を含んだ茶褐色を呈す。弥生時代後期末（庄内併行期）に属すると考えられる。同時期の遺物としては第２調査区から河内産甕の口縁部（PL.８左上写真下段）と吉備産甕の口縁部（PL.８左上写真中段）が出土しており、各地からの搬入品が含まれている。これら、弥生時代後期末の遺物は今回の調査地の南半に堆積する黒褐色シルト層から出土している。

飛鳥時代

２～５は須恵器の坏蓋で、坏Ｈ蓋と、坏Ｇ蓋がある[28]。口径は10cm前後から11cmである。２は第２調査区ＳＢ02からの柱穴出土で、建物の時期を示す資料である。6は須恵器の壺蓋と考えられる。口径は9.8cm を測り、口縁端部は内側に肥厚する。７～11は須恵器の坏である。７・８は坏Ｈで、10・11は坏Ｇである。口径は10は9.4cm 、11は10.8cmを測る。12は土師器の坏で内外面はヨコナデを施す。口径は11.2cmを測る。13・14は須恵器の甕の口縁部で13は内彎して立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部は内側に肥厚し内傾する面を持つ。外面には２条の沈線を巡らし、その上下に波状文を施す。14は内側に屈曲する受け口状の口縁を持つ。外面には屈曲部に突帯を巡らしその下に波状文を施す。13・14共に胎土は明灰色である。15は土師質の釣鐘形蛸壺の釣り手部分である。２～15の土器類は７世紀前半の飛鳥時代のもので、調査地南半からの出土が多い。

奈良時代～平安時代

16～18は須恵器の坏蓋で偏平な天井部につまみを持つ。19は須恵器の坏Aで体部は斜めにたちあがり口縁端部は若干外反する。20～25は須恵器の坏Ｂである。高台がやや内側に付き、底部から緩やかに屈曲して上方に延びる体部のもの（20～22）と、高台が体部との境目付近に付き、斜めに直線的に広がる体部のもの（23～25）とがある。前者は８世紀代、後者は９世紀代のものである。26・27は須恵器の埦で平高台に斜めに直線的に開く体部を持つ。28・29は貼り付け輪高台を持つ須恵器の皿で、灰釉陶器の皿を模したものである。30・31は須恵器の壺の底部である。31は底部の外側に輪高台を貼り付ける。32は双耳壺の肩部である。肩部に１条の突帯を巡らし偏平な把手を付ける。33は土師器の鉢の底部と考えられる。34・35は土師器の甕で、35は内面にケズリを施す。36・37は灰釉陶器の埦で、36の内外面には淡緑灰色の釉がかかる。38・39は緑釉陶器の埦で、いずれも胎土は土師質である。淡緑色の釉がかかる。以上16～39は８世紀～10世紀の奈良時代から平安時代前半の遺物で、特に９世紀～10世紀の遺物は今回の調査地北半からの出土が多い。以上の土器類のほか第１調査区北半からは馬の下顎第３後臼歯が出土している（PL.９）。出土層位から平安時代前半のものと考えられる。

遺物　出土地区一覧

番号	出土地区	番号	出土地区	番号	出土地区	番号	出土地区	番号	出土地区	番号	出土地区	番号	出土地区	番号	出土地区
1	２区SB03柱穴	6	２区中	11	５区	16	１区北	21	１区SD04	26	２区中	31	１区北	36	１区北
2	２区SB02柱穴	7	５区	12	２区南	17	２区中	22	１区中	27	１区北	32	１区北	37	１区中
3	５区	8	２区中	13	２区北	18	２区中	23	１区中	28	２区中	33	２区中	38	１区北
4	５区	9	２区中	14	２区北	19	１区北	24	５区	29	１区北	34	１区北	39	１区中
5	５区	10	２区南	15	２区中	20	２区中	25	１区中	30	１区北	35	５区		

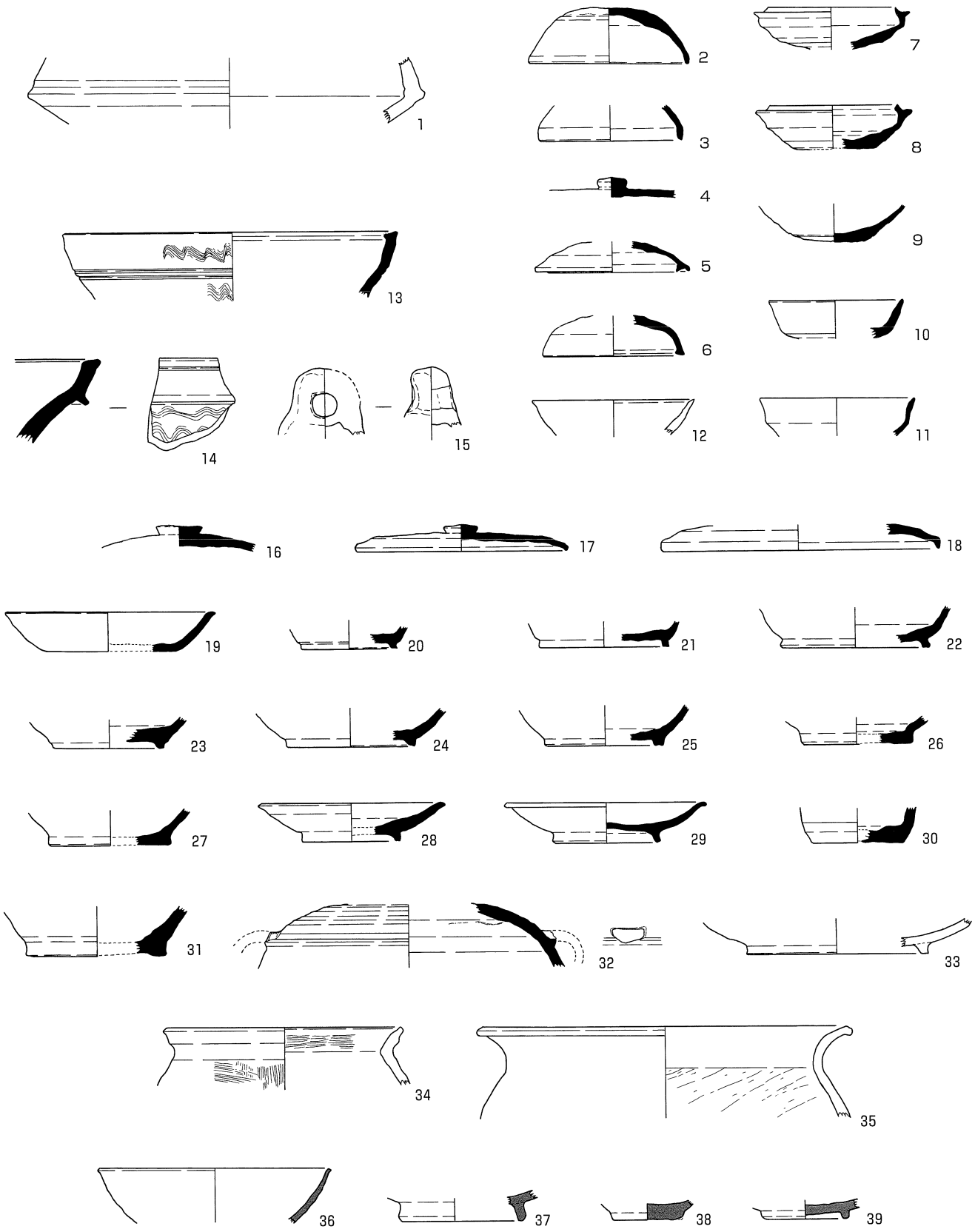


fig.14 出土遺物実測図

第３章　まとめ

本報告の調査は、御蔵遺跡全体の中で東端に位置するが、飛鳥時代の掘立柱建物３棟が見つかるなどの成果を得た。今回の調査は第１章でも述べたように御菅東地区震災復興土地区画整理事業の道路部分の調査であったが、この道路工事と共に御菅東地区では住宅等の復興も進んでおり、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査も今回の調査地の近辺で数回行われている。以下、それらの調査成果も含め御蔵遺跡東半にあたる国道28号線以東の遺跡の状況をみる。

弥生時代後期末

今回の調査地を含め、近接した地区では弥生時代後期末（庄内併行期）の遺構は見つかっていないが、遺物包含層等から遺物が若干出土している。これらの遺物の中には、讃岐地域、吉備地域、河内地域から搬入された土器が含まれている。当遺跡の中心から西半にあたる御菅西地区の土地区画整理事業に伴う調査においても、同時期の住居址[29]や土器溜まり等の遺構が見つかっており、その中にも他地域からの搬入土器が混じっている。六甲山南麓の神戸市域において、この様に他地域からの搬入土器が多く出土する遺跡としては、東灘区の森北町遺跡[30]が挙げられ、御蔵遺跡も森北町遺跡と同様に、この時期の中心的な集落と言える。但し、御菅西地区においても住居址はこれまで１棟しか見つかっておらず、今後の調査において居住域が確認されることが期待される。

この時期の遺物は第２・第５調査区からのみ出土しており、今回の調査区域では南半に近接する地点に、この時期の遺構が存在するものと思われる。

飛鳥時代

飛鳥時代の遺構としては掘立柱建物が３棟みつかった。このうち２棟は２間×２間の総柱の建物で、規模もほぼ同じである。柱の掘形も一辺50cm～70cmと、この時期の建物としては大きく倉庫の可能性が高い。ＳＢ02は3間×3間の側柱のみの建物だが、柱穴の柱痕から須恵器の坏蓋が口縁を上に向けて据えた状態で出土しており、建物の時期を示す資料である。この遺物からＳＢ02は７世紀前半の建物と考えられるが、他の２棟も柱穴の埋土は同様で、建物の方向も同じくするので同時期の建物と考えられる。このように方向を同一にし、整然と並んだ倉庫を含む建物群があったことが、今回の調査で明らかになった。建物の方向は、この地域の現況地割り方向とは違い、ほぼ南北を意識した方向である。

この付近では今回報告した建物以外にも３ないし４棟の掘立柱建物がみつかっている。そのうち２棟は当調査で見つかった建物とは違い、２間×３間以上の長方形の側柱のみの建物であり、柱穴も小さい。また建物の方向もやや西に振る。これらの建物の柱穴からは少量の遺物しか出土していないため、建物の正確な時期は判らないが、付近から出土する遺物を見ると今回の調査で見つかった３棟とほぼ同時期と考えられる。このことから、性格の違う建物が同時期に存在したと考えられる。

今回の調査で見つかった建物も含め、これらの建物群は、今回の調査地区の南半から主に見つかっており、飛鳥時代の遺物も南半に集中することから、倉庫を含めた建物群がこの地域に集まっていたものと考えられる。

奈良時代～平安時代

奈良時代から平安時代の遺構は主に北半の調査区からみつかっている。灰釉陶器や緑釉陶器の破片や瓦片も出土しており、付近に何らかの建物があったと考えられる。浅い落ち

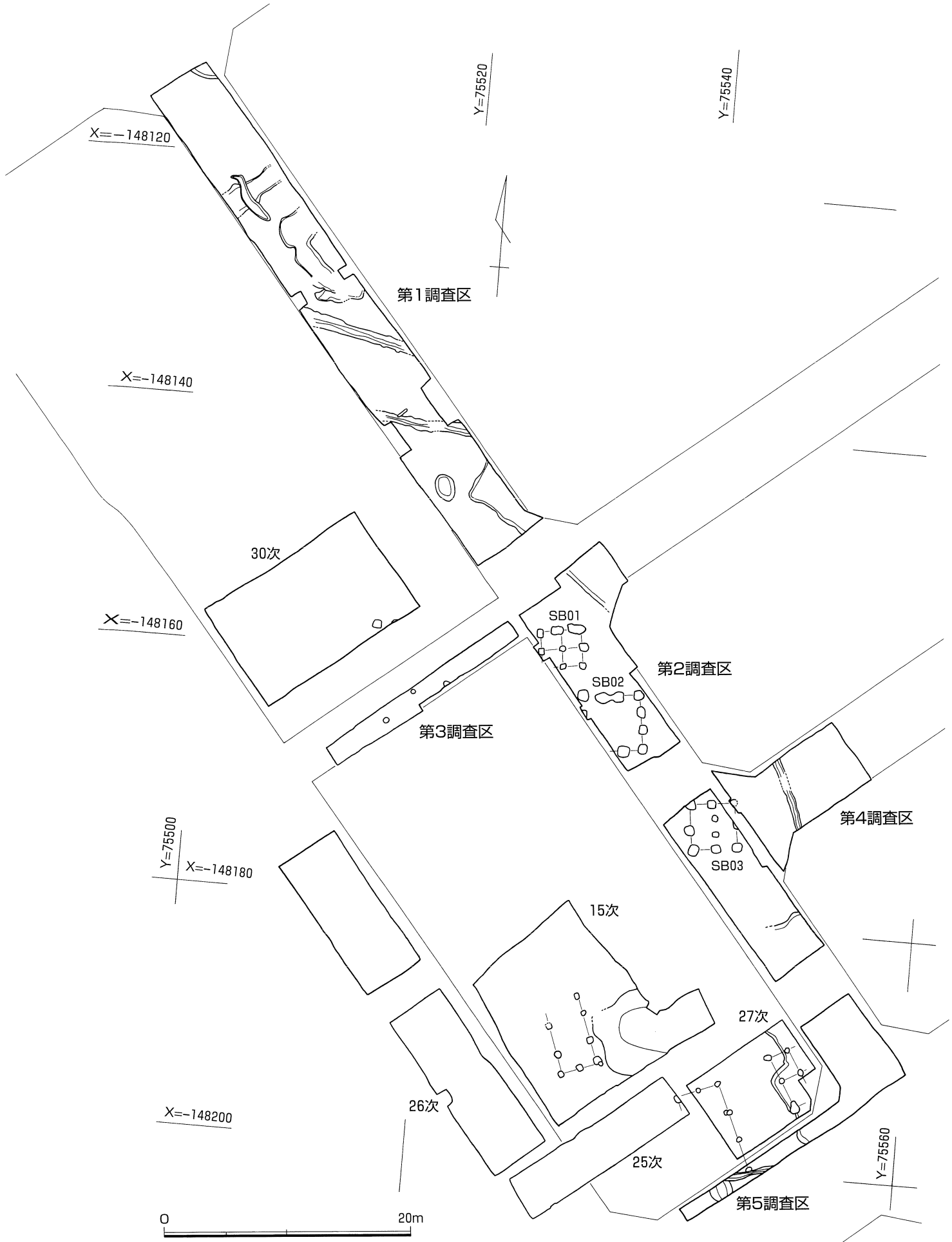


fig.15　御蔵遺跡東半　主要遺構配置図

込み状の遺構の底には、馬と考えられる足跡が多数見られるものが多い。また馬の臼歯も第１調査区から出土していることから、付近で馬を飼育していたものと考えられる。今回の調査地北半では主に９世紀から10世紀の遺物が出土していることから、これらの遺構は平安時代前半の時期を中心とする遺構と考えられる。第１調査区で見つかったＳＤ03・ＳＤ04の2条の溝は、ほぼ東西方向を向いており。この時期の遺構も飛鳥時代と同様、現況地割りとは違い、真の東西南北を意識した遺構である。

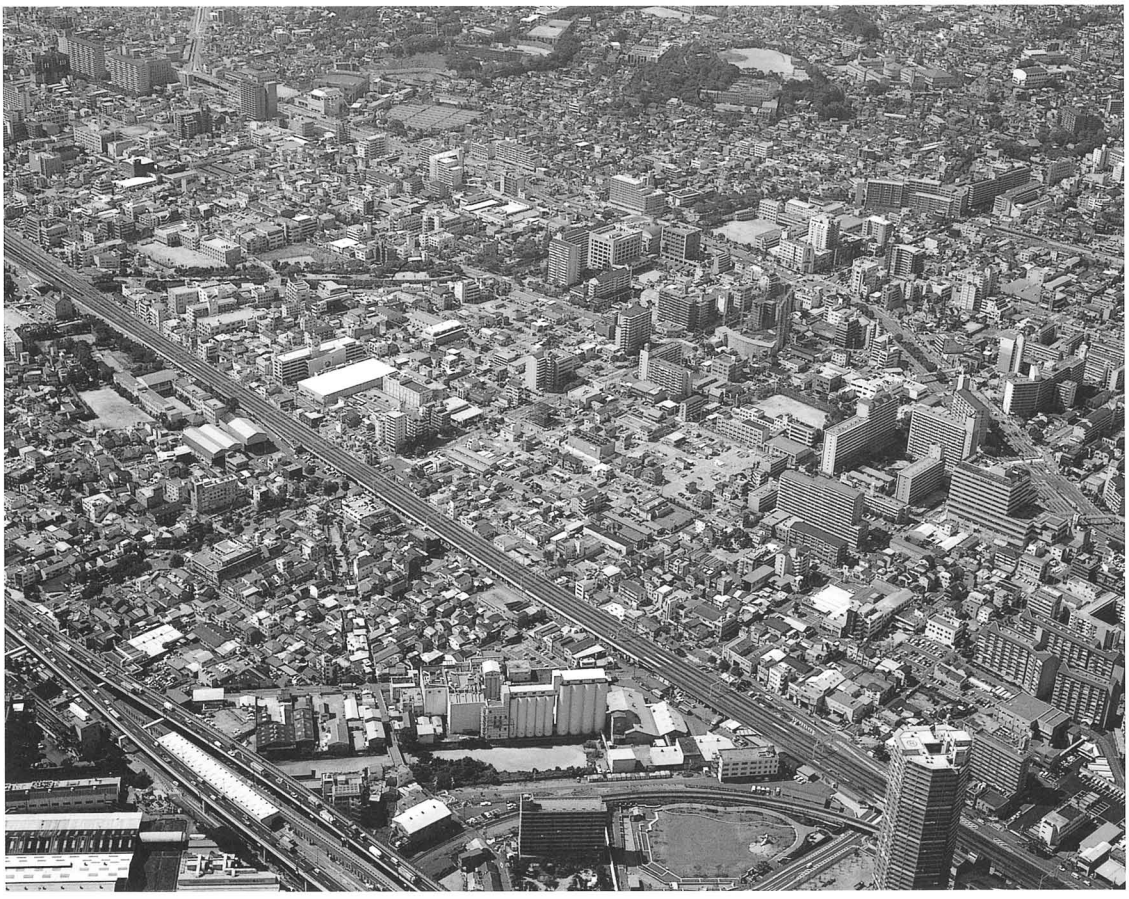
以上、今回の調査地およびその付近では、弥生時代後期末・飛鳥時代・平安時代前期と３時期の遺構・遺物が見つかっており、それぞれの時期において比較的大規模な集落が営まれていたと考えられる。

註

(1) 会下山遺跡でナイフ型石器が採集されており、名倉遺跡で縄文時代中期の土器などが採集されている。
『縄文人のくらし』神戸市立考古館1979
直良信夫「神戸市名倉町出土の縄文土器片」『近畿古文化叢考』1943
(2) 前田佳久編『大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1993
(3) 山本雅和『戎町遺跡第１次発掘調査概報』神戸市教育委員会1989
(4) 丸山潔他『楠・荒田遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1980
(5) 千種浩他『松野遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会1983
(6) 黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会1990
(7) 大平茂編『神戸市鷹取町遺跡』兵庫県教育委員会1991
(8) 山田清朝他『若松町遺跡』神戸市教育委員会2000
(9) 『神戸市長田区三番町遺跡現地説明会資料』妙見山麓遺跡調査会1987
口野博史他「三番町遺跡第２次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994
黒田恭正「三番町遺跡第３次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994
(10)梅原末治「神戸市板宿得能山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯1925
(11)吉井太郎他「会下山二本松古墳及び経塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第五輯1923
黒田恭正「会下山二本松古墳」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1987
(12)梅原末治「神戸市夢野丸山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯1925
(13)西岡誠司「神楽遺跡」『昭和59年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1987
(14)池田毅他「上沢遺跡第９次調査」『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
(15)喜谷美宣「市街地に消えた古墳－念仏山古墳－」『神戸市立博物館研究紀要』第６号 神戸市立博物館1989
(16)西岡巧次「湊川遺跡」『昭和61年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1989
(17)森田稔「長田区観音山古墳の出土遺物」『博物館だより』№23神戸市立博物館1988
(18)兼康保明他「長田野田遺跡第１次調査」『平成７年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1999
(19)吉川義彦『大田町遺跡発掘調査報告』大田町遺跡調査団・関西文化財調査会1994
口野博史他「大田町遺跡」『平成３年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1994
森内秀造他『大田町遺跡』兵庫県教育委員会1993
(20)菅本宏明『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会1981
(21)斎木巌他「上沢遺跡第３次調査」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1999
斎木巌他「上沢遺跡第８次調査」『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
(22)川上厚志編『二葉町遺跡第３・５・８・９・12次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2001
(23)口野博史編『松野遺跡第３～７次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会2001
(24)東喜代秀「御船遺跡第１次調査」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1999
池田毅「御船遺跡第２次調査」『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
(25)関野豊「御蔵遺跡第２次調査」『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会2000
(26)田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ1966
(27) (財) 香川県埋蔵文化財調査センター森下英治氏・信里芳紀氏、(財) 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター梅木謙一氏の御教示を得た。
(28)土器の名称は奈良国立文化財研究所の用例に準じた。
(29)山田清朝他『神戸市御蔵遺跡－第８・９・10次調査－』神戸市教育委員会2000
(30)丹治康明他「森北町遺跡」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1992

図　　版

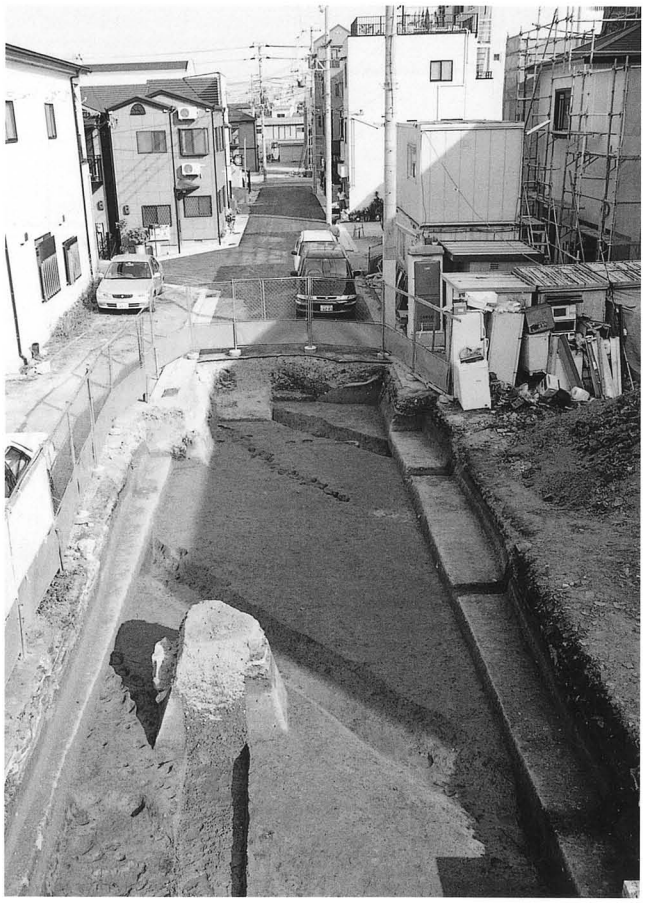
御蔵遺跡全景（南から）



御蔵遺跡全景（東から）

PL. 2

第１調査区北半全景（南から）

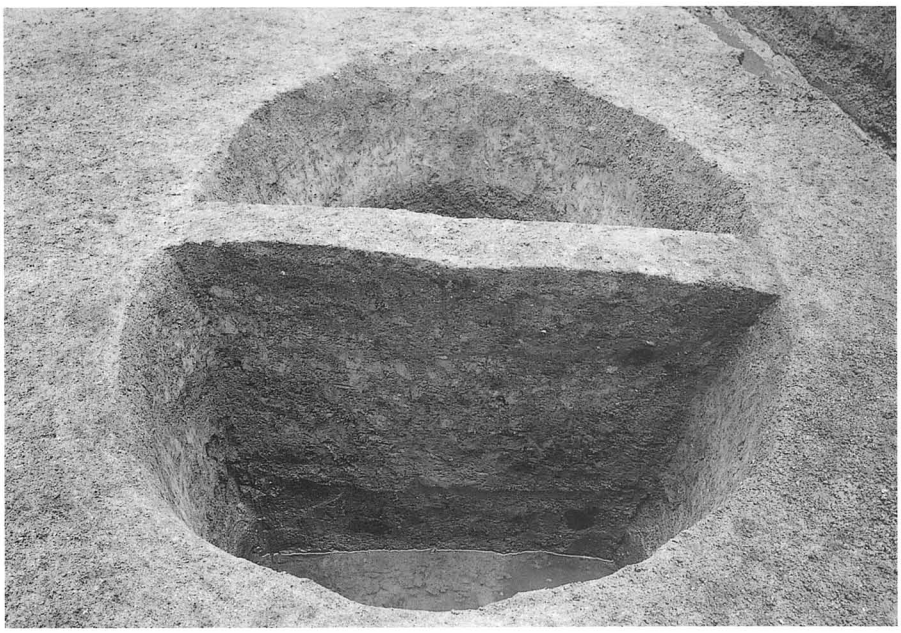


第１調査区中央全景（北から）

第１調査区南半全景（北西から）

第１調査区
ＳＤ03・ＳＤ04
（南から）

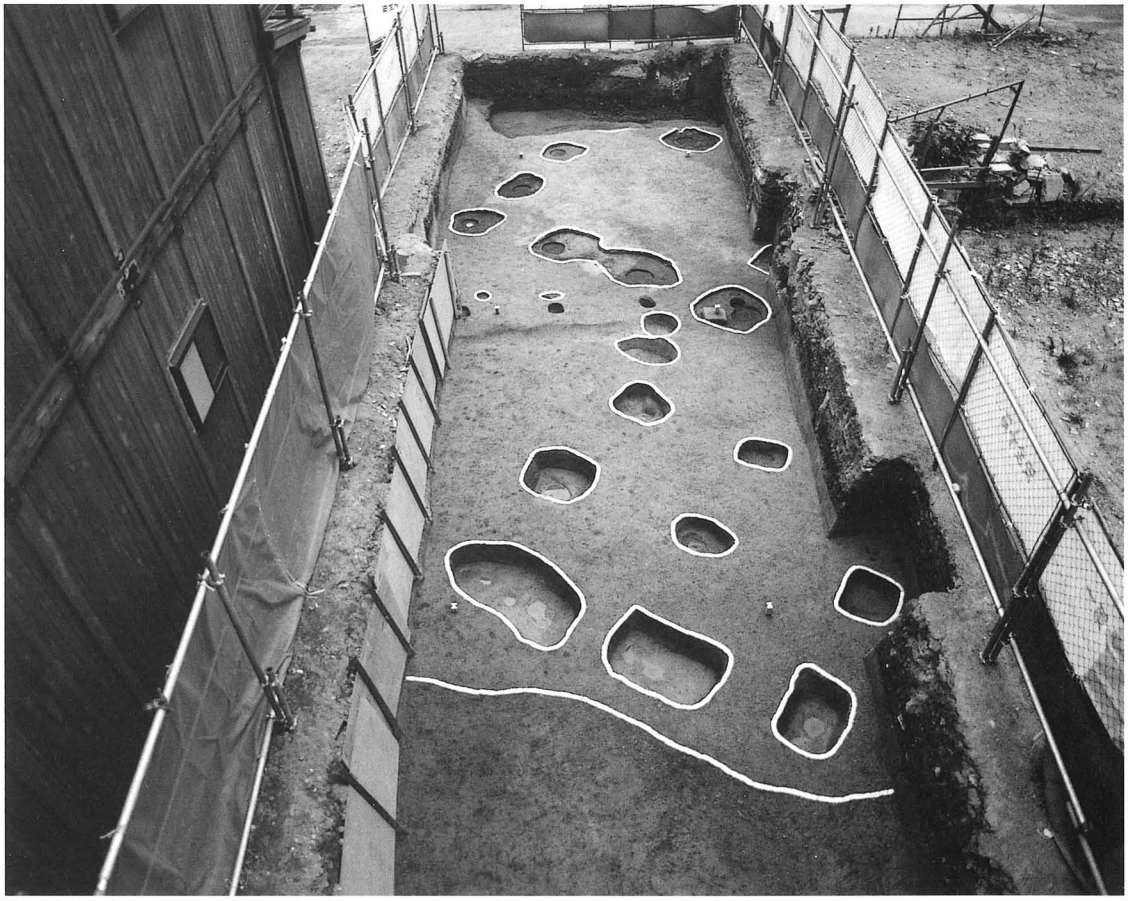
第１調査区
ＳＫ01・ＳＤ04
（北から）



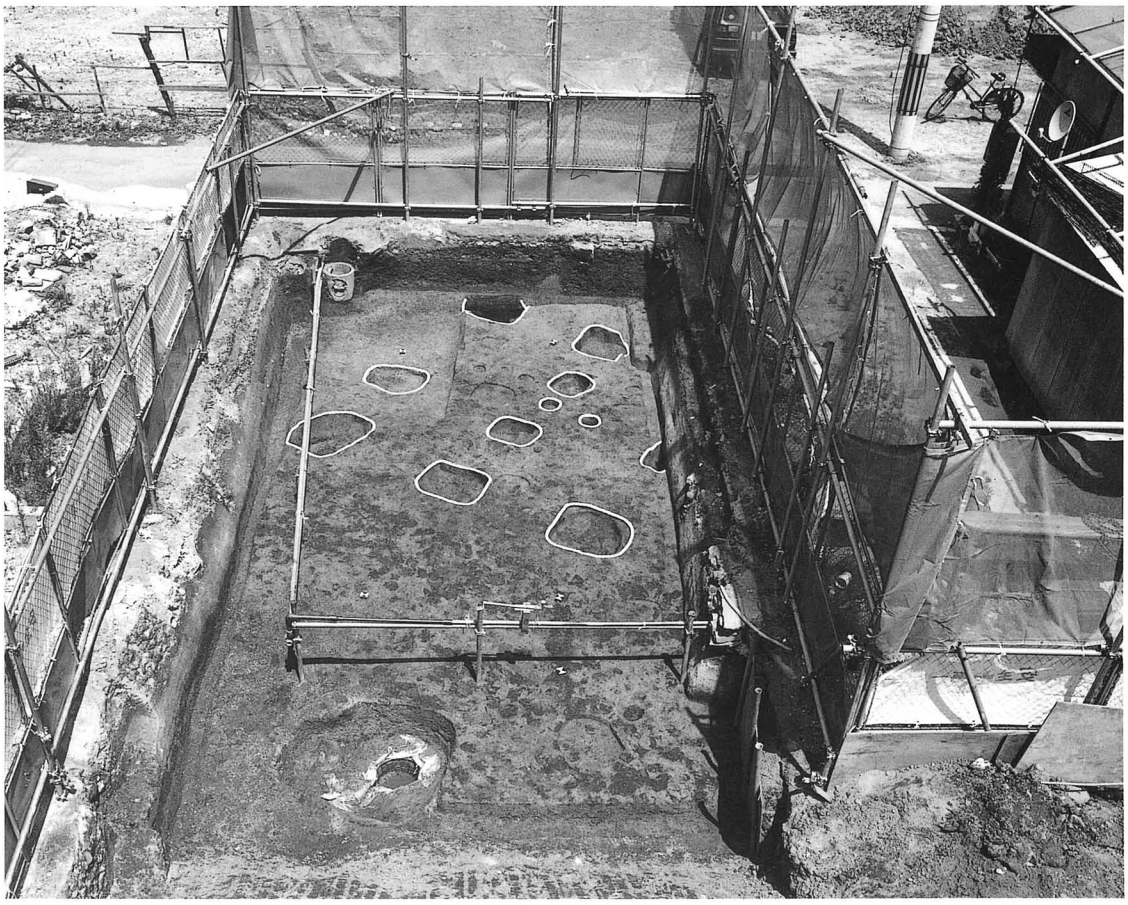
第１調査区
ＳＫ01断面
（北から）

PL. 4

第 2 調査区全景（上が北）

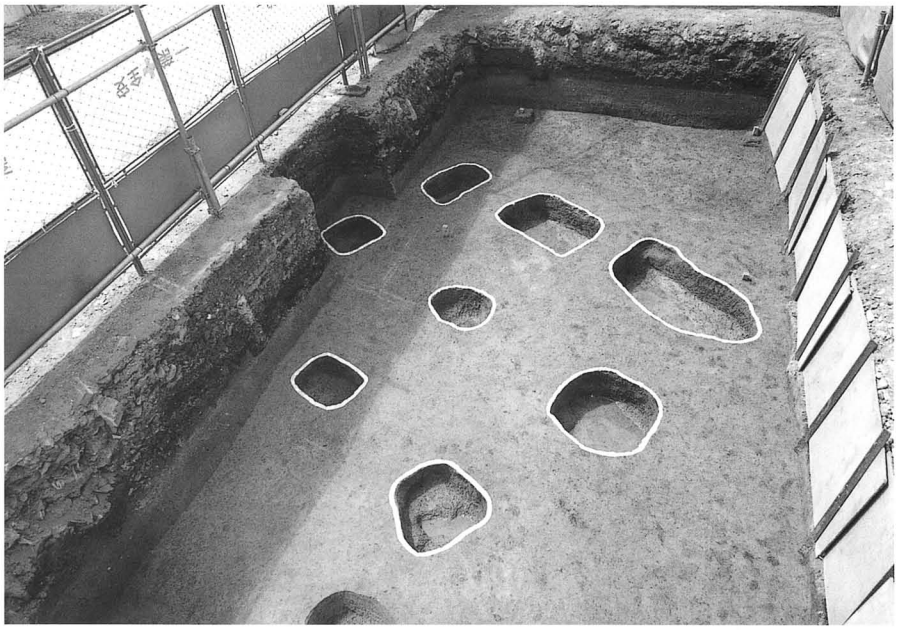


第 2 調査区北半全景（北から）



第 2 調査区中央全景（南から）

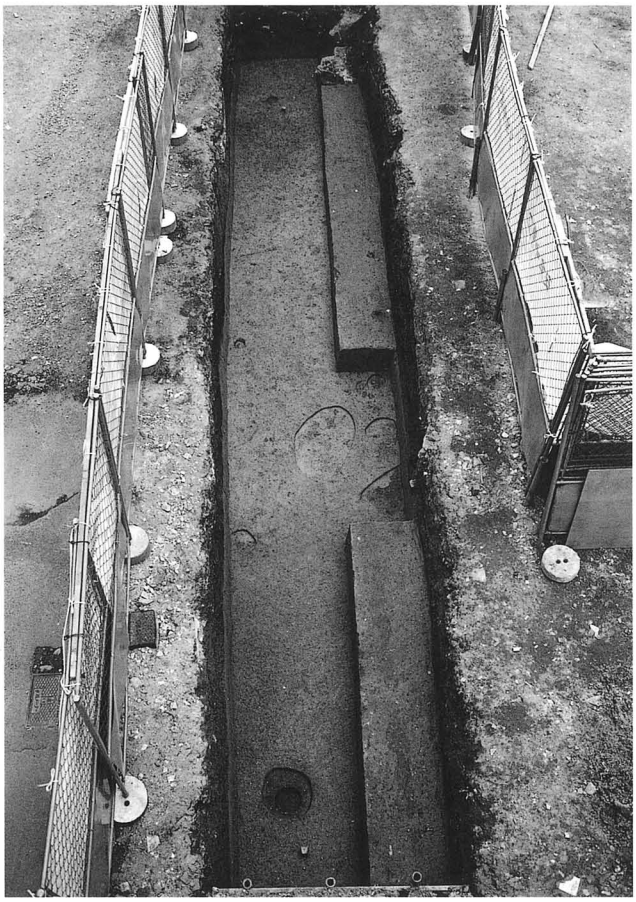
PL. 6



第 2 調査区
ＳＢ01
（南から）

第 2 調査区
ＳＢ02
（東から）

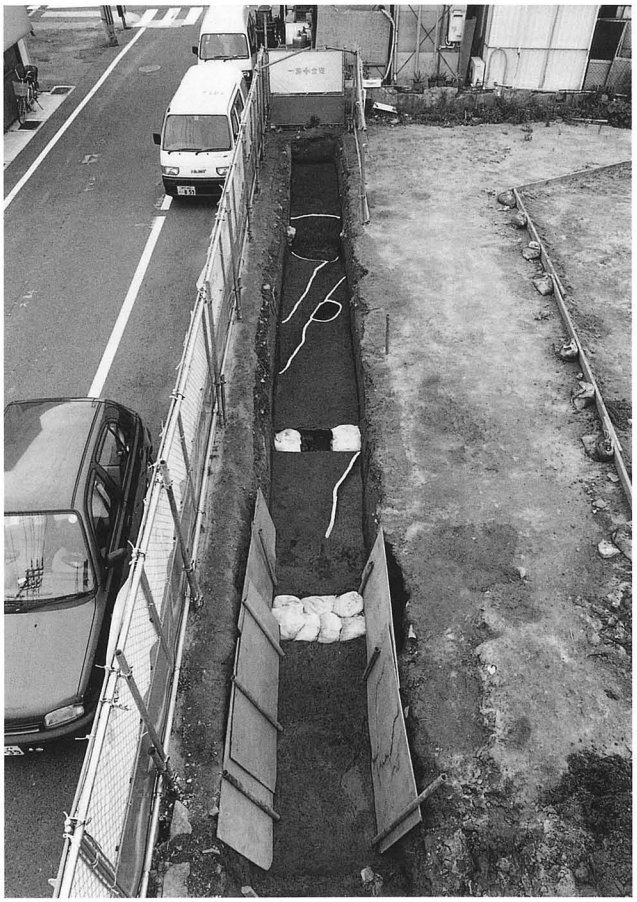
第 2 調査区
ＳＢ03
（南から）



第 3 調査区東半全景（西から）

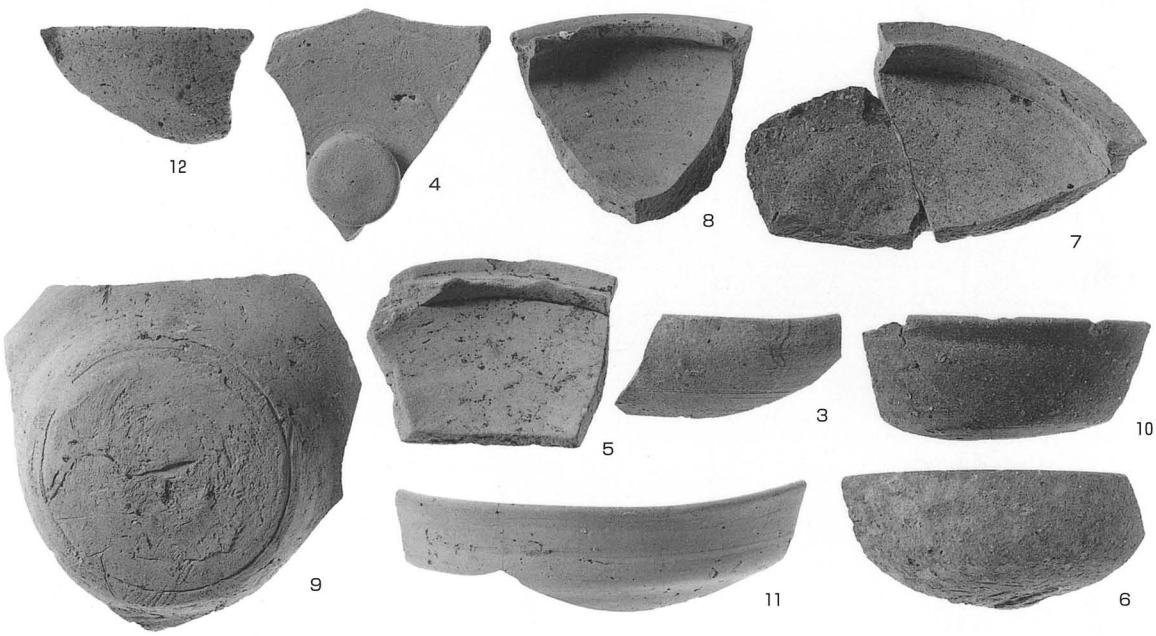
第 3 調査区西半全景（東から）

第 4 調査区全景（西から）



第 5 調査区全景（東から）

PL. 8



出土遺物（1）

29

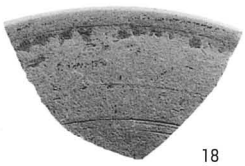
36

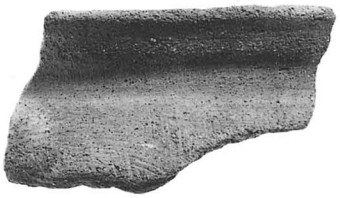
32

38

39

37

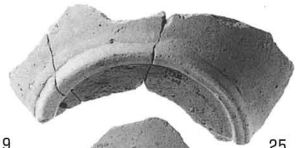

18


34

16 17

35

19

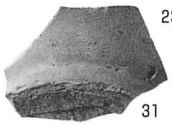

25

24

23

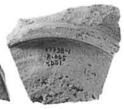
22

20

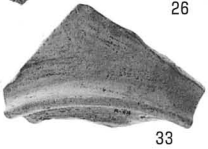

31

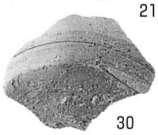
27

26


21

28


33


30

出土遺物(2)

報　告　書　抄　録

ふりがな	みくらいせき　だい17・38じ　はっくつちょうさほうこくしょ
書　名	御蔵遺跡　第17・38次　発掘調査報告書
副書名	御蔵東地区震災復興土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	安田 滋（編）　池田 毅　阿部　功　中居さやか
編者機関	神戸市教育委員会
所在地	〒650-8570　兵庫県神戸市中央区加納町６丁目５番１号　　TEL 078-322-5799
発行年	西暦2001年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ミクラ イセキ 御蔵遺跡	ヒョウゴ ケン コウベ シ 兵庫県神戸市 ナガ タク 長田区 ミクラトオリ 御蔵通 ４丁目	28106	６－18	34度 39分 42秒	135度 09分 27秒	17次 19990614～ 19991221 38次 20000530～ 20000905	472 139	神戸国際港都建設事業御菅東地区震災復興土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御蔵遺跡	集落跡	弥生時代後期末～平安時代前期	飛鳥時代 掘立柱建物址３棟	讃岐産壺 吉備産甕 土師器，須恵器	

御　蔵　遺　跡　第17・38次 発　掘　調　査　報　告　書

２００１．３．３１

発行　神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL 078-322-5799

印刷　岡村印刷工業株式会社
奈良県高市郡高取町車木215
TEL 0745-62-2701

神戸市広報印刷物登録・平成12年度　第405号 (広報印刷物規格　A－６類)

再生紙を使用しています。